座長：西　本　美恵子

「コミュニケーション・言葉というくすりが効くとき」

フリーアナウンサー
大野城まどかぴあ女性センター所長
林　田　ス　マ

■ 略歴

☆昭和22年12月16日生れ
☆福岡県嘉穂郡出身
☆元ＲＫＢ毎日放送アナウンサー
☆昭和46年、結婚のためＲＫＢ退社。その後９年間の専業主婦を経て昭和55年、フリーとしてアナウンサーの仕事に復帰
☆平成６年11月、エッセー「ことばの花束」出版
☆平成８年４月より大野城まどかぴあ女性センター所長に就任
☆平成11年10月、エッセー「こころの花束」出版
☆主婦のモニター組織ｆ（エフツウ）事務局代表
☆福岡家庭裁判所　家事調停委員
☆筑紫女学園短期大学　非常勤講師
☆現在、テレビやラジオの番組を中心に、企業やＰＴＡの講演、各種シンポジウム・対談また、エッセーの執筆なども行う

医療現場におけるコミュニケーションは大変難しいものだと思います。“量より質”その質の良さとはいったいどんなものなのでしょうか。それぞれ立場のちがう者同士がかけ合う言葉が心に届いた時、お互いにとても幸せな気持ちになるものです。

治療を受ける患者、治療を施す医療従事者、どちらもお互いの立場を理解しようと努力し合う時、すばらしいコミュニケーションが生まれるはずです。意思の疎通が上手くいった時、患者は“良い治療・幸せな治療”を受けたと満足するはずです。

患者とは自分勝手でわがままでプライドの塊で、中々手間のかかるものだとお思いでしょう。本当にそうなのです。痛み、苦しみ、不安、悩みを抱えながら診療所を訪れた患者は平常心を失っていることがあります。だから信じられない程扱いにくい人格になってスタッフの方々をこまらせてしまうことがあるのかもしれません。しかしそんな時、いたわり、励まし、慰め、思いやり、同情、共感…等々を小さな言葉に変えてみると、患者は突然素直なこころを取り戻すことがあるのです。ことばが治療に付加価値をつけることさえあると思います。ほんの少しでも相手の心に近付いてみること、そこから優しさが生まれ、温かい診療時間が流れていくことでしょう。

“痛い”という先入観でドアを開けて訪れる患者への挨拶から、治療を終えて次回の予約までコミュニケーション能力は大きな武器となるはずです。

言葉が効くはなしをたくさん持って参ります。スタッフの方々とコミュニケーションしながら共に考えたいテーマです。